

大人たちが手本となって



8月23日は、毎年恒例の「夏休みあしつ親子参拝」。
子供に信仰の喜びを伝えようと、大勢が親子で参拝する。

真朋

発行所
天理教芦津大教会
〒546-0003
大阪市東住吉区
今川8丁目6番32号
電話 06 (6702) 1980
FAX 06 (6700) 1854
Eメール shinmei@ashitsu.or.jp
印刷所 天理時報社

三つの信条、神一条の心と、ひのきしんの態度と、一手一つの和を、小さい時分からしっかりと教理という理屈ではなく、習慣という身についたものとして頂きたい。

二代真柱様お言葉

私は天理教少年会員です。教えを守り、ひのきしんにはげみ、互いにたすけあつて、立派なようばくに育ちます。

「天理教少年会員のちかい」は、「神一条の精神・ひのきしんの態度・一手一つの和」というようばくの三信条を、小さい頃から体得できるように、子供たちにも分かる平易な言葉で表したものです。

少年会活動の目的は、子供たちを御存命の教祖に喜びいただける人材に育てることにあります。教会や地域での少年会活動を通して、小さい頃から教えに触れ、信仰の喜びを体感する。そのことがやがて立派なようばくへと育つ礎となります。

少年会のちかいは、子供が唱和するためだけでなく、育てる側の大人の誓いでもあります。知育・体育は学校などの教育で身に付けることができますが、「心の徳育」は親が伝えるものでしょう。少年会活動は、親が伝え切れないことや、子供の徳を伸ばすために必要な「縦の伝道」の要。そしてその芯は、親をはじめとした大人たちの信仰姿勢であり、私たちの喜びの姿こそが、子供たちの未来なのです。

正面方加

アメリカのエモリー大学における著名な実験。それは、マウスに特定の香料をかかせる際に電気ショック

を与えることを繰り返した場合、そのマウスによって交配した孫の世代が、同じ香料に対してその匂いがかがせただけで恐怖行動を示した、と報告されている。

親の恐怖体験の繰り返し、何らかの記憶として孫の世代に伝わるのか、と思うと恐ろしく感じる一方、もしこうした体験を喜びや勇みの節と受け止められたなら、これも同じように次代へと伝わるのでは。

そう考えると、次代へ信仰の喜びを伝える、今を生きるわれわれようばくの責任は大きい。

《6月月次祭 挨拶》

温かな情と確かな理をもつて
おたすけと丹精に励もう

大教会長 井筒梅夫

只今は、6月の月次祭を共に勇んで勤めさせていただきました。皆様方には、日々信仰の道にお励みくださり、たすけ一条に勇んでお通りくださいまして、誠にご苦勞様です。

今はちょうど梅雨真つ盛りの時期です。梅雨は、しとしとと長雨になり、湿度も上がってジメジメとした日が続きます。気分は晴れず、湿っぽく落ち込みがちになる。とにかくうつうつしい、梅雨は苦手だ、と思う人はたくさんおられると思います。

この梅雨という漢字は、調べてみると中国が由来です。中国大陸を横断するアジア最長の長江の流域で、梅の実が熟す頃に降る雨を「ばいう」と呼んだことに始まるそうです。日本でも、初夏に梅の実が熟して、黄色くなる時期と重なることから、この頃に降る雨を「ばいう」とするようになったと聞きます。また梅雨にはさまざまな名前があつて、麦が育つ時期の雨という意味から、「麦雨（ばくう）」とも言います。田植えに必要な雨であることから、「田植え雨」とも呼びます。つまり、梅雨は、人が生きていく上の糧となる農作物の成長に欠くことができない雨として、古くから大変重宝がられ、重要視されてきたのです。たとえ周囲からうつろしがられようとも、欠くことができない雨なのです。私たち教会長、ようぼくの大切な役目は、おたすけと丹精であ

ると、常々申しています。人をたすけ、導き、育てるためには、理と情の両方が必要になると思います。陽気な明るい心で、相手に接することが基本の態度であることには間違いありません。時には、相手の心を和らげようと、褒めたたえることも必要になるでしょう。しかし、ただ耳障りのよいことばかりを言っていたのでは、いい人で終わってしまいます。おたすけ人はただのいい人で終わってはいけません。たとえ相手に煙たがられても、この人はどうすればたすかり、成人ができるのかという思案に立つて、反省を求めることや、あるべき心の在り方と通るべき道筋を、心優しく丁寧に伝えることを忘れてはならないと思います。

この理と情の割合ですが、梅雨の時期は1年12カ月のうちの2カ月ほどですから、情が10、理が2ぐらいと私は考えます。基本は愛情です。情で相手を抱えながら、理を治めてもらえるように、根気よく導いていくのが、おたすけと丹精の態度ではないでしょうか。

この理と情というものは、おたすけと丹精の場面に用いるだけのものではないことは、皆さんもよく分かっておられると思います。わが心の成人も、理と情によるのです。お道は陽気ぐらしの教えでありますから、物事を明るく陽気に前向きに悟らせていただく。先を見据えて、陽気ぐらしへ向けて意気揚々と勇んで進むことが肝心であることは言うまでもありません。しかし時には立ち止まって、これまでの来し方を振り返り、わが心と行いを顧みることを忘れてはなりませんし、日々の暮らしの中でも、心のほこりを払って胸の掃除をする、またいんねんを自覚して通ることも忘れてはいけません。時には自ら激しくさんげをする必要も出てくると思います。

我が心の在り様、立ち位置を教えに沿って確認して、そこから陽気に勇んで先へ進んでいくことが大切です。親神様は可愛い子供である私たち人間を、理と情をもってお育てくださっています。常に慈愛溢れる親心をもってお抱えくださり、時には厳しい理を示して、真にたすかる道へとお導きくださっています。私たちお互い、温かな情と確かな理をもつて、心の成人に努力を重ね、おたすけと丹精に勇んで励ませていただきたいと存じます。

先ほどは世話人・島村先生から、信心ということについて先生自身が悟られたことを示してくださいました。信心とは、おたすけにいただいた元一日を忘れることなく、その御恩報じとして、たすけ一条の道を歩み、たゆみなく成人の道を進めることであると、こうした話であったと思います。教祖から教えていただいたおつとめを勇んで勤め、おさづけを積極的に取り次がせていただき、たすけ一条の道を着実に歩ませていただいて、お互い信心に励ませていただきたいものです。

私たちの初代や先人は、ちば、お屋敷に心を向け、足を運び、真実を尽くして通ってくださいました。そしてちばの理をいっばいに頂戴して、数々の結構な理を足元で見せていただいて、たすけ一条に活躍されたのです。そのおかげで今日があることは間違いない事実です。そして先人が繋いでくれたこの道を次の代へ、末代へと繋いでいく責任が私たちにはあります。

先人方がそうであったように、ちば一条、親一条の信仰信念を心に湛えて、たすけ一条の道を明るく勇んで進ませていただきたいと存じます。

(要約)

立教百八十九年 六月 月次祭祭文

これの神床にお鎮まり下さいます親神天理王命の御前に、天理教芦津大教会長井筒梅夫、慎んで申し上げます。

親神様には神人和楽の世界を楽しみに、この世人間をお創め下され、永の年月、尽きせぬ御守護にお護り頂き、温かき親心のまに／＼成人への道をお連れ通り下さいます御慈愛の程は、誠に有り難く勿体ない限りでございます。私共は、日々感謝の心を忘れることなく、一層の成人を期してたすけ一条に励ませて頂いておりますが、その中にも今日の吉日は、おちばよりお許しを頂きました尊き日柄でございますので、只今から役目にあずかる者一同、座りづとめ、陽気てをどりを勇んで勤めて、六月の月次祭を執り行わせて頂きます。御前には、今日を大切な一日と思い念じて参き集いました芦津の道の子達が、一れつの陽気ぐらしを共に祈念してつとめに勇む状を御照覧下さいまして、親神様にもお勇み下さり、たすけ一条の道の更なる進展の御守護を賜りますようお願い申し上げます。

教祖百四十年祭の年も、すでにその半分が過ぎようとしております今日、私共をはじめ、芦津に繋がる教会長、ようぼくは、改めて銘々の足元を見つめ直し、持ち場立場の役目を真剣に果たして、次の塚への確かな成人の歩みを、心勇んで進めさせて頂く所存でございます。

尚、今月の月次祭には、世話人・島村廣義先生がおちばよりご巡教を下さり、ご講話を頂戴致します。陽気ぐらし世界実現の本源であるおちばに、一同心を真向けて、ちば一条、親一条に真心を尽くさせて頂きたいと存じます。

何分にもお目だるところがあろうかと存じますが、精一杯の精神で務めさせて頂く所存でございますれば、何卒親神様には、一同の真実をお受け取り下さいまして、大いなる御守護を以て、世界たすけのようぼくとして存分に働かせて頂けますようお願いの程を、一同と共に慎んでお願い申し上げます。

《6月月次祭 神殿講話》

入信の元一日に立ち返り

ひたすら成人の道を歩み続けよう

世話人 島村廣義先生

子供可愛い親心

教祖百四十年祭の年も半分が過ぎようとしております。私たちは三年千日と仕切って、教祖にいかにお喜びいただくか、成人の実をご覧いただくかということで、「諭達第四号」を基に、所属する教会ごとで心を定めて年祭活動を勤めてきました。これまでの年祭活動は、大抵おちばから声を頂き、お打ち出しいただいた活動を一つ心で勤めてきたわけですが、このたびの年祭活動は、それぞれの教会ようぼくが、我が心に定めた心定めをもって、年祭活動を勤めてまいりました。

今、振り返ってみて、「定めた通

急き込みくたさったわけです。

教祖のたすけ一条の道は、つとめ一条の道です。このつとめはもちろん、かんろだいを忠にしてお勤めくたさるかぐらづとめと、てをどりが元になっています。

このおつとめを勤めるようにと教祖のお急き込みを、当時の先生方はなかなか実行に踏み切れなかった。その原因は、おつとめを勤めると教祖に御苦労をお掛けするからです。教祖の御身を思うばかりの心から、なかなか仰せいただく通りにおつとめを勤めることができなかつたわけです。

初代真柱様は、「教祖の仰せと法律を守ることに、この両方が同時に行える道を教えていただきたい」と仰せられたのですが、それに対するお言葉は、

さあ／＼月日がありてこの世界あり、世界ありてそれ／＼あり、それ／＼ありて身の内あり、身の内ありて律あり、律ありても心定めが第一やで。

明治20年1月13日

と、世の中の物事の成り立ち、順序を論され、その順序の中に律があつても、元なる親神様の心に添い切る心を定めることが第一である、とお仕込みくたされたのです。

このお言葉に初代真柱様は、意を決しておつとめの勤修に踏み切られるのですが、「おつとめを勤めたら教祖はお元氣になつて、親心を掛けてくたさるに違いない」と思つていたにもかかわらず、御姿を隠されるという結果になるわけです。当時の先生方は悲嘆に暮れていたのですが、飯降伊蔵様におさしづを伺われると、

さあ／＼ろつくの地にする。皆々揃うたか／＼。よう聞き分け。これまでに言うた事、実の箱へ入れて置いたが、神が扉開いて出たから、子供可愛い故、をやの命を二十五年先の命を縮めて、今からたすけするのやで。しっかり見て居よ。今までとこれから先としっかり見て居よ。

とお言葉が下がり、教祖が御姿を
明治20年2月18日

隠されることに至った親心を諄々とお諭しくださるわけです。

教祖がなぜ御姿をお隠しになつて、存命の理でお働きのいただくことになったのか。それは、おつとめを勤めると、即、教祖に御迷惑が掛かるところから、当時の先生方が教祖の御身を氣遣つて、なかなか踏み切れなかった。しかし、御姿を隠されたことによって、教祖に危害がかかる術がなくなつたわけですから、仰せ通りにおつとめを勤めることができるようになったのです。

また、教祖が御姿をお隠しくださつたことによって、尊いおさづ



けの理をお渡しくだされるようになり、道の路銀として、たすけ一条にしつかり精を出して勤めてくれるように、という親心をお掛けいただくようになったのです。

また、土地所に拠り所、教会名称の理をお許しいただくようになつて、だんだんと道具衆の働きのよつて道の進展を見るようになるわけです。

二代真柱様が、
始めた理と治まりた理と、理は一つである。明治 29 年 2 月 29 日
とのおさしづを引いて、「陽氣ぐら

しの道をお教えくだされたのも、人々の成人を促して身を隠されたのも、その理は子供可愛いという親心からのことだ」と仰せくださいましたように、それぞれが教祖の親心をしつかり心に治め、改めて親の思いにお応えする心の成人をすること、これが親心にお応えする道です。

さらに真柱様は、
年祭に向かつての、いわば非常時の歩みは終わりました。これ

からは普段の歩みになつていくわけですが、普段といつても、三年前に戻つてしまつたのでは何にもなりません。三年間の努力のうえに立つた歩みを続けていかなければならないと思ひます。

とお諭しくださいました。三年千日の活動をお互いに振り返り、それを踏み台として新たな歩み出しをさせていただく、基礎固めをさせていただくわけです。

元一日に立ち返る

次の塚というと、教祖百五十年祭、立教二百年という大きな節があります。それに至るまでに、芦津大教会の 140 周年記念祭、また会長様の理を譲るということを開いておりますが、代替わりをして新たな若い力を結集し、それに皆が力を足して、芦津大教会のこれからの先行きをしつかり勤め切ることに大切です。この大きな道の流れを思案するとき、三年千日で勤めてきた活動をここで緩めてしま

うのではなく、その活動が正真正銘、自分たちの力、身となつて、次の塚を目指す原動力になるよう、力を蓄えるというか、真に自分自身の力として身に付くよう頑張ることが、これからの歩みの進め方だと思ふのです。

元の理のお話を思案するとき、それぞれ元一日という原点に立ち返り、今まで歩んできたところから五分、さらに前進するということ、道の進め方をさせていただきたい。それぞれの信仰の元一日に立ち返り、これからの先行きをしつかり思案して決めて、活動を進めていきたいと思ふのです。

そこで、信仰の元一日を思案すると、多くの場合は、身上や事情など、ならん中を親神様におたすけいただいた。この親神様のお手引きから、いろいろと教えを聞き分け、それを実践、実行して、教えられるままに道を歩いてきた、私たちの先輩たちの歩みがあつて、今日までに至っている。そういうことを思ふとき、それぞれがもう

一度、入信の元一日に立ち返り、今日の私たちのところまで振り返ってみて、それを新たな出発の力にしっかりさせていたただかなければならないと思うのです。

信心について

その上で、私は思案の仕方として、みかぐらうたにお記し下さっている「信心」ということを勉強しながら、思召を悟らせてもらいたいと思います。

信仰という言葉は、直接みかぐらうたに仰せくだされていませんが「しん／＼」という言葉で仰せくださっています。6カ所出てまいります。その一つ一つの意味合いを悟らせてもらうと、入信の元一日、おたすけにいただいたことが元で信仰が始まって、こうのうの理を戴く、おたすけ人に成長していくところまでの順序が、「信心」という言葉で申し述べられています。

最初に出てくるのは、三下り目の九ツ、

こゝまでしん／＼したけれど
もとのかみとハしらなんだ

です。「御教えによつておたすけにいただき、お導きいただいた信心してきたれど」ということです。が、この教えというのは、かしまの・かりものの教理です。

にんけんハみな／＼神のかしものや
なんとをもふてつこっているやら

三号 41

にんけんハみな／＼神のかしものや
神のぢうよふこれをしらんか

三号 126

め／＼のみのうちよりのかりものを
しらずにいてハなにもわからん

三号 137

「かしまの・かりもの、教えの台」

とお聞かせいただく教理ですが、この教えが心に治まれば、親神様のお心というものが見えてくる、胸に治まってくるということをお教えいただいています。

おたすけにいただいた喜びで、御恩報じの道として、教祖の仰せにただくまに通つてきたけれども、親神・天理王命様が、世間のあり

きたりの神ではなく、人間世界をお創りくださった元の神様であるということをはからせていただくことができた、という意味です。

元の神様ということですが、別席のお話の中でも、親ということについてお取り次ぎをさせていただきます。自分の父母は誰なのかを知っているのはなぜか。自分の知らないことを知っているのは、親が教えてくれたからこそ。その親を順々に遡っていけば、親神様に行き着く、ということをお話しします。そして教祖のおかげで、私たちは初めて親神様の存在を知ることができたのだ、とお教えいただくわけです。

飯降先生の入信のお話でも、「救けてやる。救けてやるけれども、天理王命という神は、初めてのことなれば、誠にする事むつかしかる。」

『稿本天理教教祖伝』49頁と仰せいただきましたが、飯降先生をはじめ当時の先生方は、本当に素直に教祖を信じ切ってお通り

になりました。

世界一れつの陽気ぐらしを

次に出てくるのは、五下り目の五ツ、

いつまでしん／＼したとても
やうきづくめであるほどに

というお歌です。お道を信仰しているからには、どんなときでも陽気でなければならぬ。親神様を信じながら、案じ心や心を曇らせるような不足の心ではいけません。お道の信心は、日々結構と勇んで通らせていただくことに喜びがある、信心の素晴らしさがあるということを教えていただきます。

今の道互いの道。辛い者もあれば、陽気な者もある。神が連れて通る陽気と、めん／＼勝手の陽気とある。勝手の陽気は通るに連れん。陽気というは、皆んな勇ましてこそ、真の陽気という。めん／＼楽しんで、後々の者苦しますようでは、ほんとの陽気とは言えん。めんめん勝手の陽気は、生涯通れると思たら

違うで。

明治30年12月11日

とあります通り、いくら信心をしていても、本当に心底から親神様に連れて通っていたく陽気を、しっかり心に治めて通ることの大切さを教えていただきます。

続いて、

どうもしんぐするならば
かうをむすばやないかいな

というのが、五下り目十のお歌です。このお道は、世界一れつをたすけるためにお啓きくだされた世界たすけの教えですから、自分一人の信仰に留めることなく、世界の人々に伝え広めてこそその教えです。「自分さえ良ければ、我が家さえ良かったらいい」ではなく、世界中すべての人々のたすかりを願ひ、世界一れつの陽気ぐらしの実現を目指す教えです。

そういう上から、どうでもこうでもの思いで熱心に信仰するのならば、同じ志を持つ人たちが寄り合い、手を取り合って「講」という一つの拠り所を拵えていこうではないか。志を同じくする信仰者

が寄り合って、切磋琢磨しながら成人の道を歩んでいこう、と呼びかけているお歌です。

教祖は文久、元治の頃から「講を結べ」とお急き込みくだされています。その頃、教祖におたすけにいたでいて、お導きに從って寄り集う人たちが増えてきました。そういう人が寄り合って、お互いに切磋琢磨する講を結べ、ということとを仰せになっています。明治11年4月頃、秀司先生を中心にして、おぢば近郷の信者が寄り合って「真明講」が結ばれています。信仰を進めていく上に講が必要とお教えいただき、後に教会名称として理を許されるところへ続いていくのです。

おさづけの理

次に出てくるのは六下り目、なんぼしんぐしたとてもこゝろえちがひはならんぞへやつぱりしんぐせにやならんこゝろえちがひはでなほしやこゝまでしんぐしてからハ

ひとつのかうをもみにやならぬと、七ツ、八ツ、九ツの一連のお歌です。

どれほど長い間、結構に熱心に信心していても、親神様の思召に外れた考えや行いをしていては御守護は頂けない、ということでしょう。思召に適わない信心では、長く信仰して熱心なだけに、かえって始末の悪い結果になってしまふこともあります。心違いを改めて、よく反省して、初心に帰って信心をやり直すことをお教えいただいています。この「出直し」とは、死んでおしまいの意味ではなく、一からやり直しをお促しくださっているのです。

そして「ひとつのかうをも」の「かう」は、功能の「功」と悟らせてもらいます。なぜならば、次の十下に、

このたびみえました
あふぎのうかゝひこれふしぎ
と、「扇のさづけ」のことが出てくるからです。

教祖は25年先の定命と引き換え

に、おさづけの理をお渡しくださるようになりますが、たすけ一条のためにお渡しくださるさづけの理にはいろいろあり、「扇のさづけ」というものがありました。これは今日、私たちが一般に戴いているおさづけではなく、扇のさづけという、個人に戴いたおさづけです。他にも「肥のさづけ」というものもありましたが、「ひとつのかうをもみにやならぬ」とは、親神様が熱心に信心するその姿を見て、おさづけの理を渡して、このうの理を見せてやらなければならぬ、とお教えくださっているわけです。

成人の道を歩む過程

6つのお歌の意味合いは、「たすけ一条の御用の上に立ち働いてもらいたい」という親神様の思召であり、教祖のたすけ一条の御用を勤めるための道具衆を引き寄せる姿だと思ふのです。身上をたすけられ、事情を治めていただいて、言われるままに素直にこの道を通

ってきたけれども、その過程で、だんだんとたすけ一条にお使いいただく道具として、成人の道を歩ませていただいている姿です。

こうしてみかぐらうたを最初から考えていくと、たすけ一条の道としてお教えいただくおつとめについて、道具立てを整えてくださっている姿を悟るのです。

扇のさづけということに至ると、正しく教祖の名代として御用を勤める姿です。例えば、飯降伊蔵先生も扇のさづけで御神意をお取り次ぎくださいました。たすけ一条の御用の上にお使いいただくようばくとしての成人の姿を垣間見ることができと思うのです。

ですから、私たちはお歌の意味を理解しながら、その親心をしっかり思案しなければならぬと思います。

合掌の手の意味合い

もう一点大切なことは、おつとめの手振りを教えていただいていることで、「理を振る」ともお教え

いただいています。

「しんぐ」という言葉の部分はすべて合掌の手です。合掌とは、天理王命様を表す手振りであり、同時に信心という、信仰することでも合掌です。そして、「あしきをはらうて」の「あしき」が合掌です。ところで、なぜあしきが合掌なのかと思うのですが、これはおたすけを意味しているのだと思うのです。親神様への祈願を意味する手を表しているわけで、あしきという心のほこりを全部払っていたきたい、と親神様をお願いするその祈念、たすけを意味するから、合掌の手になっていると、私は悟るのです。

合掌の手とは、たすけ一条のこのうの理をお表してくださっている手振りであり、これはおつとめを意味しているわけで、おつとめを忘れて信心はあり得ないということを、心して考えなければならぬと思うのです。

また、信仰しているという意味合いは、たすけ一条の御用を勤め

るという意味です。今はおさづけの理をお渡しくださるようになっていくわけですが、おさづけを拝戴して、たすけ一条の御用を勤めることができるよう成人させていただく、ということが大切です。

またおてふりの足の動きを考えみると、「しんぐ」のときの足は、すべて神様の方へ近づいていく前進する足、もしくは前で足踏みをしします。逆に言えば、後ろへ下がる足はありません。

そう考えると、お互いが教祖のたすけ一条の道具衆に成人させていただくということ、つまり親神様の思召に近づかせていただけるよう、しっかりと前を向いて歩ませいただく、前へ向かって進むことが大事だと思案するのです。

教祖のひながたを思案してみますと、教祖はたくさんの人々をおたすけくださり、お導きくださいました。

『逸話篇』をひもといてみると、初めておちばへ帰ってきて、身おたすけを願われた方に対して、お

たすけいただく道として、あるいはおたすけいだかれた方に、御恩報じの道として、「人をたすけて回る」ということをお促しくださっています。その方法もいろいろあり、神名を唱えておつとめをすること。あるいは、御供や御神水を頂かせて神様をお願いをするということ。あるいは、自分がたすけていただいたことを人様に取り次いで、親神様の十全の守護を人様にお話ししてにをいがけすることなど、具体的に教えくださり、お促しくださっています。

心を定めて人だすけを

さて、信心ということをいろいろ考えてみるに、この年祭活動をして3年間勤めてきたけれど、しっかりと思召しただくような通り方をしてきたかどうかを反省するとともに、今後の通り方として、これの一つの参考に、親神様、教祖に向けて前進の足取りを歩ませてもらうことが大事だと思います。

三年千日の通ってきた道すがら

た方々は、初代の道を思案するとともに、代々どのようにその理を受け継いで、今日に至るまで通つてくださったのか、ということをお案してみると、自分の歩むべき道筋が見えてくると思いますし、今後おたすけに向かうための、自分の勇みの台になると思うのです。やはり人様をたすけて回ることおさづけを取り次がせてもらうことが、道具衆として一番の御用です。その上に、どういう心配りを自分ができるかをしっかり考えて、これからの道をお通りいただきたい。先ほど申した通り、しっかりと心を定めてお通りいただきなさいと思います。

3年後には芦津大教会の創立140周年記念祭、そして新しい会長就任奉告祭。その後は教祖百五十年祭、立教二百年と大きな節がこれから目白押しです。勇んで、お互いにこの節を乗り切らせてもら

神殿に心定めが掲げてあります
が、この心定めは、大教会長様が
勝手に書いて、真柱様にお届けし
たわけではありません。芦津大教
会みんなの心定めですし、この心
定めを真柱様はかんろだいにお供
えくださり、御守護いただけるよ
うにご祈念くださっているのです
そういう「芦津大教会の心定め」
ですから、みんな心して、どうで
もこうでもの心でお通りいただき
たいと思います。

「できなかつたら仕方がない」と
いうのでは、心定めではありません
ん。あくまでも神様との約束は絶
対です。御守護いただけるよう、
しつかり心を揃えて踏ん張ってい
ただきたい。

この点をお願いしまして、今日
の私のつとめを果たしたいと思い
ます。

ご清聴ありがとうございます
(文責 編集部)

六月月次祭 祭典役割																
胡 三 味 琴 弓 線			小 太 拍 ちやんぼん すりがね 鼓 木 笛			地 方		てをどり					扨 者	扨 者	祭 主	
望 井 岡 月 筒 島 恵 ちぎよの 美 さの			加 岡 井 奥 瀧 竹 世 島 筒 田 本 内 田 秀 敏 眞 義 洋 男 成 二 忠			瀧 岩 奥 本 切 田 庄 正 正 司 教 徳		奥 前 会 湯 井 大 田 会 長 川 筒 教 富 長 夫 文 会 長 美 夫 人 圀 夫 長			座りつとめ	岩 切 正 義	守 田 清 一	大 教 会 長		
岩 岩 松 切 切 本 治 孝 だ 代 子 え			浜 梶 石 蔑 立 木 田 川 川 内 花 村 宣 和 健 善 真 郎 隆 郎 浩 文 次			河 吉 山 端 田 本 芳 裕 義 雄 和 範		松 加 吉 中 西 山 森 世 田 村 本 田 明 田 幸 義 道 美 陽 子 之 弘			前 半	賛 者	賛 者	指 図 方		
河 瀧 浜 合 本 田 ふ 美 千 み 奈 代 実			岡 望 河 梶 村 松 本 月 合 川 田 森 久 慶 善 和 光 誠 昭 太 洋 人 伸 太			湯 新 樋 川 居 川 正 里 泰 信 実 士		今 梶 木 榎 吉 花 川 川 村 康 田 岡 佐 正 理 紀 裕 忠 枝 美 恵 樹 和			後 半	川 畑 正 博	西 本 興 正	今 川 政 治		
佐 松 岩 山 齊 宗 梶 望 梶 藤 林 切 本 藤 我 川 月 川 敏 英 正 義 道 芳 慶 和 幸 也 晴 彦 明 征 太 人			伝 供 内 道 義 忠 弘 忠			岩 切 正 教			献 饌 長							

喜びの奉告祭

7月5日、真伯教会（ブラジル・サンパウロ市）は、大教会長夫妻をお迎えして、創立30周年記念祭並びに岡本たねよ・二代教会長就任奉告祭が勤められた。

午前10時、岡本会長がポルトガル語で祭文を奏上。

続いて、大教会長が挨拶。岡本公夫前会長の父・常造氏が昭和32年にブラジルに渡り、出直すまでの25年間、芦津のブラジル伝道の



先頭に立ち、筆舌に尽くせぬ苦勞を勇んで通られた足跡に敬意を表された。続いて現地の参拝者にも分かるように陽気ぐらしの道の歩み方を分かりやすく話され、さらに岡本公夫前会長の30年の苦勞を労われた上、参拝者には新会長を芯に一手一つに歩むよう望まれた。続いて、陽気におつとめを勤め、ブラジル伝道庁長からのお祝いのメッセージ、岡本新会長、前会長からのお礼の挨拶に続いて、司会より前会長に花束が贈呈された。祭典後、会場を教会の庭に移し、シユラスコパーティを開催。七夕の音楽が流れる中、参拝者が短冊に願いをしたため、笹の葉に丁寧結びつけた。さらには真伯に繋がる方々による出し物があり、盛況のうちに午後3時、幕を閉じた。所属の違うブラジルの教友も大勢お祝いに駆け付け、参拝者は、128名であった。

雅楽講習会開催

6月21日、祭事部雅楽掛（奥田眞治主任）は、亀岡大教会・泉祐一先生を講師にお迎えし、大教会で、雅楽講習会を実施した。

今回は主に、月次祭の祭儀で奏上する曲目を練習。午前は管別に分かれて、午後からは陽気ホールで合奏練習を行った。

参加した11名は泉先生の指導を熱心に傾聴し、各自担当する楽器の演奏技術の向上を図った。



第100回天理教青年会総会

おぢばが、僕らをつつにする。

10/27(火) 午前10時
本部中庭



基本方針「心を澄ます毎日。」

現在、青年会では「心を澄ます毎日。」を基本方針に、そして「一人が一人のおたすけ相手」との活動目標を掲げ、そのための「おたすけ願」の活用を推し進めています。10/27の総会には、各自が「おたすけ願」を持参して、誰かのたすかりを願っておぢばに帰らせていただきます。

前夜祭：10/26夕づとめ後 芦津分会も
模擬店出店予定

修養科を修えて

「もたれきる」

これが信仰者の幸せ

真明彰化教会

許 霏形 25歳

私は信仰三代目で、小さい頃から祖母や母に連れられて教会に通いました。祖母からは「親神様に心からもたれなさいよ」とよく聞かされていました。不思議なお話の数々を聞き、親神様の存在を疑ったことはなかったのですが、自らが実感したことはありませんでした。

19歳の時に母が出直し、祖母の「息を引き取る世話も、親神様の御守護なんだよ」という言葉を、そのとき強く実感しました。私はこの節こそが、自分の信仰の本当の出発点だったと思います。

このたび親神様にお導きいただき、祖母と共に修養科に入科しましたが、修養科に入る2週間前、突然私の両手



に、十数個ものウイルス性のイボができたのです。間もなく日本へ来る予定だったため、その大半は治療できないままでした。だから、症状が次第に悪化して、不安な気持ちはあっても「おちばへ帰れば必ずおたすけいただける」と信じていました。

私はこれまで「繋がり」というものをずっと恐れていました。人に迷惑をかけることを恐れ、「自分一人どうまく生きていければ、それが一番安全な生き方だ」と思っていたのです。しかし、日々の修養科生活を通して、私の考えは少しずつ変わっていききました。

1つ目の変化は、「人と人との繋がり」についてでした。

私はこれまで、人は自立する力を身に付け、人に迷惑をかけずに生きるべきだと思っていました。しかし、互いにたすけ合う生活の中で、人は決して一人だけでは生きていけないと実感しました。「自分は何でもできる」という高慢な心を捨て、謙虚な心で互いに支え合ってこそ、本当の意味での繋がりが生まれる、と学ばせていただきました。

2つ目の変化は、「人と神様との繋がり」についてでした。

毎朝、朝づとめの前、私は神殿へ向かう坂道で、よく空を見上げています。晴れている日もあれば、霧が立ち込める日もあり、雨の日にはまた違った景色が広がっていました。けれども、どのような天気であっても、親神様はいつも私たちをお守りくださっていると感じることができました。

心の目を開いて日々過ごしていると、親神様はさまざま

な形を通して、絶えず私に知らせてくださっていると感じます。それは誰かの一言や、ふと目にした光景、あるいは心の中に響いてくる声であったりします。

修養科での数々の不思議ないんねんを通して、私はすべてが親神様の親心によるお計らいだと、身をもって感じました。私はただその道を、お導き通り素直にまっすぐ歩んでいけばよいと思っています。

3つ目は「私と自分の心との繋がり」についてでした。

この3年間、私は自分の進むべき道について迷い、行き詰まりを感じていました。しかし、修養科でのわずか3カ月の中で、親神様と教祖は、さまざまないんねんの姿を通して、その答えを見せてくださり、自分自身の立ち位置と果たすべき役割を見出すことができました。

それは「自分の心に正直に向き合うこと」でした。なぜなら、親神様はいつも私たち

一人ひとりの心の中でお働きくださっているからです。

出直した母が、人生の最後に私に残してくれた「人の一生は、心から信じられるものを、一つでも見つけられれば、それでいいのよ」という言葉を思い出します。

「もたれ切る」とは、ひたすら信じ切ることです。すべての事柄には神意があると受け止め、人生における節を神様のお手引きととらえ、感謝と喜びの心を持続続ける。そうすれば、自然に親神様と繋がり、安心して魂を親神様に委ねてもたれ切ることができるのだと思います。

私は、それこそが今回の修養科で頂戴した、信仰者としての幸せなのだと思います。

この度の修養科生活で、「切る御守護」というお手引きをもつて、「つなぎの御守護」という花を咲かせてくださった、親神様と教祖に、心より感謝申し上げます。

(修養科第108期感話大会より)

会長室報

青年・女子青年勤務

【詰所・会長宅】

岩切 大成（四ツ山）
岩切さかゑ（四ツ山）

立教 189 年 6 月 23 日

教務部報

教養掛（6 月）

主任

高馬 三博

教養掛

山下 吉生・岡 撰子

教会長資格検定合格

中神 走（紀 周）

立教 189 年 6 月 16 日 教会長資格
検定講習会第 162 回を修了し、
翌 17 日 検定合格されました。

教人資格講習会第 162 回修了

吉田 稔（今津原）

青山由紀子（豊 野）

立教 189 年 6 月 10 日

修養科第 1018 期修了

伊藤 正俊（芦金久）

山下 保（芦山都）

楊 素満（真明彰化）

林 章祺（真明彰化）

許 霏彤（真明彰化）

立教 189 年 6 月 27 日

おさづけの理拝戴《5 月》

寺本 稜（紀 内）

《1 名》

初席《5 月》

《2 名》上郡、明道

《1 名》白地、山城谷、紀志

當別

《順序運びより 8 名》

お詫び・訂正

真明 678 号 10 頁「教務部報」

初席《4 月》

《7 名》真明彰化 は、

《8 名》真明彰化 の誤り

でした。お詫びして訂正いた

します。

訃 報

大朝分教会二代会長

（大島部属）

惠 光一郎さん



令和 8 年 7 月 3 日出直され
た。享年 79 歳。

告別式は 7 月 5 日、森誠一

朗・芦南分教会会長斎主のもと、

青葉会館（奄美市）で執行さ

れた。

昭和 23 年鹿児島県奄美市名

瀬小宿で生まれ、41 年おさづ

けの理拝戴、42 年修養科第 321

期修了、43 年教人登録、57 年

大朝分教会二代会長に就任。

大教会では詰員、修養科教

養掛、大島分教会では役員と

して少年会育成会長、輸送部

長、壮年部長等を歴任され、

鹿児島教区では大島支部委員

を務められた。

生涯をおたすけに、信者の

丹精に、親の御用にと、誠真
実を尽くされた。

8/23

夏休みあしつ
親子参拝

家族皆で大教会月次祭に
参拝しよう！子供用のお
下がりや、楽しい会食も
準備しています。



月例統計（自令和 8 年 1 月 1 日）至令和 8 年 5 月 31 日）

項 目 名 称 () 内 教 会 数	初 席	の お 理 さ づ け	修 養 科 修 了	教 人
大 教 会 (1)	1	1		
東 津 (13)		2		3
吉 野 (29)	6	2	2	
島 原 (16)				
日 方 (15)	3	3		
稗 島 (7)	1	1		
本 津 (2)				
始 良 (2)				
津 和 (12)				
門 司 (6)		1	3	1
當 別 (6)	1			
大 島 (26)	4	5		2
沖 縄 (3)				
尼 崎 (2)	2	1		
四 山 (5)	2			
大 冠 (2)				
島 下 (1)				
天 保 (3)				
青 山 (1)				
芦 浪 (1)				
甲 邊 (1)				
芦 華 (1)	1			
天 津 (1)				
入 江 (1)				
豊 野 (1)		1		
紀 周 (3)	4			
勝 明 (1)				
神 島 (1)				
兵庫 眞 洲 (1)				
芦 ノ 郷 (2)				
本 明 勇 (2)	1			
明 道 (1)	2			
芦 東 (1)			1	
和 鎮 (3)		1		
神 滝 本 (1)				
芦 明 徳 (1)				
眞 明 彰 化 (2)	9	5		
本 氣 (2)				
芦 明 照 (1)				
眞 伯 (1)				
合 計 (209)	37	23	6	6